# 『読書離れ』、『減少する書店』の課題とは

―公益財団法人 文字・活字文化推進機構で考える―

開倫塾
塾長　林　明夫

**Q：「読書離れ」と「書店の減少」が進んでいるようですね。**

A：(１)2023年の文化庁の調査によると、１か月に１冊も「本を読まない」人が、前回調査(2018年度)から大幅に増え、全体の６割を超え、読書量が以前よりも減ったという人も過去最多の7割になりました。本に親しむ機会を増やす取り組みを活発化させ、「読書離れ」を食い止める必要があります。

(２)この原因として、現代のネット空間では、プラットホーマーが、可能な限り多くの時間やアテンション(興味・関心)を獲得しようと、多くのコンテンツを提供。ネットを利用する時間が増えた結果、「読書の時間」が失われたという人が多いようです。文化庁でも、読書量が減った理由として、「(スマホなどの)情報機器で時間が取られる」が43.6％に上がっています。今後、生成 AI(人工知能)の活用が進めば、そうした傾向にますます拍車がかかると思われます。

(３)①街の書店は全国で減少が続いています。2003年度に20880店あった書店は、2023年度には10918店と、20年間でほぼ半減しました。

②地域に書店が一つもない「無書店自治体」は2024年現在、28.2％と全体の４分の１に上っており、一つの書店しかない自治体も19.7％あります。

③ちなみに栃木県の無店舗市町は、12.0％、１店舗しかない市町は24％。群馬県の無店舗市町は31.4％、１店舗しかない市町は20％。茨城県の無店舗市町は13％、１店舗の市町は18.2％です。

**Q：「読書離れ」がこのまま進むと、「地域に1店舗しか書店がない自治体」が、「無書店自治体」になる可能性が、極めて高くなるのではないですか。**

A：(１)その通りです。今その書店が衰退、全国各地で無書店地帯が拡大、本との出会いの場がなくなれば、そうした機能が失われるだけでなく、国の存立基盤や競争力まで脅かしかねません。

(２)ごく身近にあって様々な本との出会いをもたらす書店は、本と人とをつなぐ「地域の文化拠点」であり、その存在は、日本人の教養や人格形成と深く結びついているだけでなく、国力の源にもなっていることです。豊かな人間性を養い、自由で多様性のある健全な民主主義社会を発展させるためには、活字文化や読書活動が欠かせません。

(３)「書店」の「価値(大切さ)」をしっかり認識、日本社会から書店が急速になくなりつつある現状をこのまま見過ごすわけにはいきませんので、必要と思われる施策を考えてまいりましょう。

**Q：では、具体的には、何をどのようにしたらよいのでしょうか。**

A：「読書教育」の充実が何よりです。例えば、

（１）①「読書離れ」に歯止めをかけるには、本に触れる機会を幼児期から増やす必要があります。

②幼児にとって親しみやすいのは、「絵本」です。

③絵本は、言語力、感性、理解力を発達させるのに極めて重要です。

（２）①そこで、国立青少年育成機構は、絵本に関する高度な知識を持つ「絵本専門士」の養成制度を、2014年度からスタート(600名以上が絵本士に)。

②2029年度からは、大学や短大などと連携し、必要なカリキュラムを受講することで「認定絵本士」を養成する制度を創設(すでに4900人が認定絵本士に)。

③出版文化産業振興財団(JPIC)では「読書アドバイザー」を認定(約2900名)。

○これら、貴重な読書推進人材の力を借り、幼稚園、学校、図書館、文学館、記念館などで、読み聞かせや、読書イベントなどで活躍していただく支援を、地域や自治体で行うべきと考えます。

（３）①学校教育では、「朝の読書」や夏休みなどの「読書感想文コンクール」などに磨きをかけ、質の向上を図り、子どもたちに「読書を習慣づける」取り組みを粘り強く継続。

②「未来読書研究所」のアンケートによれば、「本が嫌いになった理由」として最も多かったのが、「なぜ、本を読まないといけないのかを、教えてもらったことがない」という回答でした。

③学校教育において、読書の大切さや楽しさ、本の読み方や選び方などを教える「読書教育」の充実が急務。

○大学の教員養成課程に「読書教育」を盛り込み、教員を目指す学生が体系的に読書の指導法を身に着けられるようにしたらどうか。本の魅力や読書の楽しさ、本の選び方などを、子どもたちに伝え、本好きの子どもたちを増やしてほしい。

**Q：書店の皆様への期待は何ですか。**

A：（１）人は、本を読むことで多様な思考に触れ、創造性や独創力を育み、それによって文化が生み出されます。さらに、読書は、読解力や創造力、共感力、交渉力、表現力を磨く知的基盤です。

（２）街の書店には、ネット書店とは違う様々な機能があります。思いがけない一冊と出会える魅力はその一つです。街の書店には、人々の居場所(サードプレイス)としての機能も持っています。店員さんや、本好きな人と出会えることもあります。ゆっくりと自分の好きな本を見出すこともできます。

（３）①「本は読んでみたいが、何を読んでいいのかわからない」「どんな本があるのか知らない」人は多いようです。

②書店員は、本選びの手助けになることを目指していただきたい。

③書店の顔の見える本棚づくりや、本の魅力を伝える様々なイベントを、読書や活字文化を大切に考えている人たちと協力して、お開きいただきたい。

**Q：学習塾・予備校・私立学校の幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。**

A：（１）「読書離れ」は由々しき問題です。

（２）目の前に存在するすべての児童・生徒・学生に対し、今からでも遅くありませんから「読書の価値(大切さ)」をしっかり「教育(読書教育)」してまいりましょう。

（３）生成AI(人工知能)を使いこなすにも、①辞書の活用で得られる十分な「語彙力」と②「新聞」で身に着く「自分で考える力」、「批判的思考能力」③「読書」によってもたらされる「思慮深さ」「自省心」「省察力」の３つは不可欠だからです。

○「お小遣い」をため、近くの「書店」で自分で選んだ本を買うことも、是非おすすめください。

＜ご参考＞

（１）今月号の内容は、2025年4月24日(木)午後15時～16時に、国会議事堂横の、参議院議員会館1階講堂で開催された、活字文化議員連盟総会、および、書店活性化へ向けた共同提言報告会(学校図書館議員連盟共催)で発表された「書店活性化に向けた共同提言」の内容を取りまとめたものです。

（２）当日は、共同提言を取りまとめた、株式会社読売新聞グループ本社・山口寿一代表取締役社長と、株式会社講談社・野間省伸代表取締役社長がこの提言内容をご報告なさりました。

○ありがたく、心から感謝いたします。

○当日は、山口氏が理事長を務める、公益財団法人文字・活字文化推進機構評議員として参加させていただきました。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：今月も、僭越とは存じますが、先生方に御参考になると思われる本を何冊か御紹介させて頂きます。

（１）一冊目は、ジョン・スチュアート・ミル著「自由論」日経BPクラシックス、日経BP社2011年９月５日刊です。アメリカのトランプ大統領が経済の根幹を揺るがすような政策を打ち出し、アメリカ国内を含め世界中に大きな影響をあたえていますので、世の中はどうあるべきか、根本から考えてみることも大切と思います。同著「功利主義」岩波文庫、岩波書店2021年５月14日刊とともにお読みください。

（２）二冊目は、以前にも御紹介いたしました、篠ケ谷圭太著「使える！予習と復習の勉強法―自主学習の心理学―」ちくま新書、筑摩書房2024年３月10日刊と同著「予習の科学―『深い理解につなげる家庭学習』―」図書文化2022年７月24日刊です。篠ケ谷先生は、「学んだことを自分のことばで説明する」ことを「深い理解」と「定義」なさり、「予習」「授業」「復習」の大切さをお教えくださっています。まさにその通り。名著と考えます。是非、御一読ください。

（３）三冊目は、渡部昇一著「かくて歴史は始まる―逆説の国、日本の文明が地球を包む―」クレスト新社1992年11月18日刊です。ＥＶ始め、世界の国々は、アメリカの影響をできるだけなしでも、相互関税を吸収してでも、自国経済や食糧・エネルギー、自国の安全保障を維持・

継続しようと決意し始めました。本書をじっくり読み直し、日本の未来は自分たちの手で築き上げて参りましょう。

2025 年 4 月 25 日記

＜プロフィール＞
開倫塾塾長、開倫塾日本語学校校長
開倫ユネスコ協会会長
学校法人有朋学院有朋高等学院理事長（福島市）
宇都宮大学大学院工学研究科客員教授、作新学院大学客員教授、
公益財団法人文字活字文化推進機構評議員
社会福祉法人両崖福祉会特別養護老人ホーム晴明苑監事（足利市）